Y5-7
DPC分析システムを活かした取り組み

徳島赤十字病院　事務部　医療業務課
○坂本（さかもと）　陽一（よういち）、兼子　初音、井織　一浩、
酒井　朋子、守田　フミ子、中西　光子、
杉本　直子、新居　ますみ、小原　富子、
塩田　輝実、新居　三智子、吉本　直正、
東根　崇朗、郷　正樹

当院では、2006年度4月よりDPCが導入され、医療業務課としては大きく業務内容が変化した。クリティカルパスの作成や病床管理、院内感染防止委員会などさまざまな場面においてDPC分析の役割が重要視されているなかで、その役割を当課が主体となり取り組んでいる。DPC分析において当課では2007年より病院経営サポートシステム「girasol」を導入した。「girasol」を使用したDPC分析の活動内容とその効果・今後の課題について報告する。当院では、医療業務課が「girasol」を使用し分析業務を担っている。主に出来高算定との比較や他院とのベンチマークを行ったうえで、その問題点と改善案を診療部門に提案している。提案事項については月一度開催されるDPC検討会にて各部門で検討し、診療内容への反映を計っている。実際に診療内容の変更・クリティカルパスへの反映まで至った症例については、3ヶ月後・1年後に効果の報告・再検討を行っている。また、適切なDPC病名の選択を行うことを目的として、診療情報管理士と密に情報交換を行うようになった。他院とのベンチマークや具体的なシミュレーション結果（数値）を提示することで各部門が大いに関心と問題意識を持ってくれるようになり、具体性の高い議論や質疑応答が活発に行われるようになった。また、様式1における留意すべきICDコードの比率が40％（20年4月）から17％（21年3月）へと減少し、医療業務課員の適切なDPCコーディングへの意識の高さが上がった。P4Pが新たな医療機関係数として議論されているなかで、「他院がしていないから当院でも必要ない。」といった単純なDPC分析ではなく、『医療の質』を考えた上での分析が今後求められる。

Y5-8
「母乳外来」の現状と看護専門職が行う乳房マッサージの収入

北見赤十字病院　看護部
○高見（たかみ）　淳子（じゅんこ）、早坂　文枝

【緒言】当院は「赤ちゃんにやさしい病院」の認定を受け、母乳育児を推進している。母乳外来は、看護専門職が育児相談や乳房マッサージ等を行っており、母児の健やかな生活を支援している。また、母乳外来は保険診療から独立し病院の収益に貢献している。今回は、母乳外来開設からの利用者の現状と収入に関して報告する。

【方法】過去4年間の調査を行った。母乳外来の費用は、事務経費として初診1000円、再診500円及び看護専門職が行う乳房マッサージ代2000円である。また、乳腺炎等で医師の診察を要す場合は、通常診療となるが乳房マッサージに関しては自費で2000円頂いている。尚、乳房マッサージは平成19年1月より1500円から2000円に値上げをしている。

【結果】母乳外来の受診件数は、年間平均260件前後で推移している。また、母乳外来全体の収入は年間平均60万円である。この中より、乳房マッサージ件数だけを抽出すると、母乳外来は年間平均220件である。また、通常診療の乳腺炎の乳房マッサージは年間平均250件である。併せて470件前後の乳房マッサージの代金は、年間平均75万円である。

【考察】当院の1ヶ月健診時の母乳継続率は8割を維持している。母乳外来受診の主目的は、母乳栄養継続のための乳房のメンテナンスが多い。また、初産婦にはさまざまな不安の解消が出来ると好評であり、ほとんどの方が利用している。母乳外来は、ケアに1時間近くかかるのが現状であり、現行の費用では費用対効果の面で検討余地が残る。しかし、多くの方々に気軽に母乳外来に来て頂くために、これ以上の値上げは難しいのが現状である。付加価値の高いケアを利用者に提供し、内容に見合うだけの費用徴収を検討することが今後の課題である。

【結論】母乳外来は安定的に利用者がおり、看護専門職の専門技術により収入を得ることが出来ている。